

事例紹介 4

子どもの様子の伝え方を工夫して、 保護者と保育者が思いを共有

板橋区立大谷口保育園（東京都・公立）

多忙な保育の中で一人ひとりの保護者と十分なやりとりを行うことはなかなか容易ではありません。子どもの年齢や保護者のニーズに合わせた、効率的で保護者の共感を呼ぶ情報提供の例をご紹介します。

園での子どもの様子をクラスごとに工夫して伝える

板橋区立大谷口保育園では、今年4月からクラスごとに保護者とのつながりを深める取り組みを始めました。園だよりや壁新聞を工夫するなど、クラスごとに取り組みを進めた結果、保護者との関係が変化しつつあります。

実践

クラスだよりや 壁新聞、連絡帳で 子どもの様子を伝える

板橋区立大谷口保育園の花野綾子園長先生は、「対等な目線を意識しながら、子どもを媒介にして保護者とつながっていききたい」と言います。このような方針のもと、2009年4月に保護者とのつながりを深める取り組みをスタート。0～5歳児の各担任がそれぞれのクラスの実態を踏まえ、クラスだよりや壁新聞、連

絡帳などを通して、保護者に園での子どもの様子を伝える方法を模索しています。

園共通ではなく、クラスごとに取

り組みを変えているのは、子どもの年齢や時期に合わせて保護者と思いを共有するため。例えば、2歳児はおしゃべりがだんだんとさかんに

掲示物の工夫



模造紙に掲示した写真に保護者や保育者が「吹き出し」を付けられるようにしてコミュニケーションを図る。



毎日の活動内容（歌・絵本・遊びなど）を掲示。手書きにするなどして負担を減らすのがポイント。

保護者の声

安田直美さん（4歳児・5歳児）

○今年から園の雰囲気がとても変わったと思います。丁寧に情報を伝えてくれるため、毎日の遊びの内容など、園での生活の様子がよく分かり、こちらも相談をしやすくなりました。クラスだよりは、父親や祖母にも見せており、子育てについて話し合う良い機会となっています。



黛恵里香さん（1歳児・4歳児）

○親子ともども、クラスだよりを楽しみにしています。ひらがなで書かれているので、子どもも一生懸命に読んで、自分について書かれていると大喜びします。子どもの様子だけでなく、保護者の声も載せられているのは、ほかのお母さんがたがどのような考えで子育てをしているのかが分かって参考になりますね。



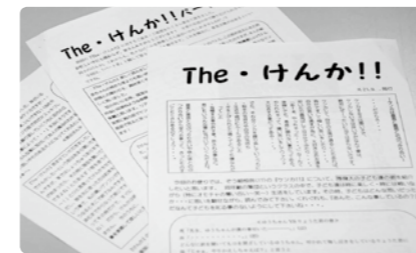
大南めぐみさん（2歳児）

○「つぶやき」が掲載されたクラスだよりは子どもが言葉を発したときの情景が浮かびやすく、読んでいて安心します。ほかの子どもに関心をもつきっかけにもなりました。子どもたちをしっかりと見てくださっているのを感じ、先生との距離も近づいたと思います。



※（ ）内は子どもの年齢

クラスだよりの工夫



子どものケンカの様子を実況風におもしろく掲載。発達に必要なケンカに対する理解を促す。

る時期。そこで、保育中に聞かれた子どもの「つぶやき」を記録したクラスだよりの発行を始めました。すると、家庭でのつぶやきや行動を報告するかが増えるなど、保護者により一層、子どもの成長に注意深くなる変化が見られたと言います。

3歳児のクラスだよりも特徴的です。友だちとの関係づくりを通して成長するこの時期は、子ども同士の衝突がしばしば起こります。しかし、ある程度のトラブルは発達上不可欠と保育者が考える一方で、必要以上に過敏になる保護者が多いというギャップがありました。そこで担任が発行したクラスだよりが、その名も「The・けんか」。実際のけんかや仲直りの場面を軽快な実況風に描写するとともに、けんかを通して学べることなど保育者の思いを伝えると、保護者の多くが理解を示し、連絡帳で長文の感想が寄せられました。

保育者と保護者が 高め合う関係へと 変化していく

保護者支援の観点から、保護者同

連絡帳の工夫



保護者から質問があったとき、了承を得たうえで、連絡帳でほかの保護者に伝えてアドバイスを募る。

士のつながりをつくることに力を入れるクラスもあります。1歳児のクラスには、ひとりめの子どもをもち、仕事と子育ての両立に悩む保護者が多く見られました。担任は、「昨夜、なかなか子どもが寝てくれませんでした。よい方法はありますか」など、保護者から質問を受けた際、他の保護者の連絡帳にメモ用紙を挟み、質問へのアドバイスを募集。翌日、アドバイスを教室の前のホワイトボードに掲示します。質問に回答する保護者は、毎回、8割以上と言います。

多くのクラスでは、情報の伝わりやすさを重視し、壁新聞などに効果的に写真を使っています。例えば、壁に写真を掲示して、保護者や保育者がコメントを自由にはれるようにしたり、写真で4コマストーリーをつくって掲示したり、保護者の関心



園長
花野綾子先生

を引くひと工夫が見られます。

「子どもの様子について保護者への伝え方を工夫するようになってから、『クラスだよりや掲示された写真を携帯電話で撮影し、父親や祖父母に見せるようになった』という声がかかるなど、子どもを媒介にしたつながりが着実に広がっている実感があります」

さらに花野先生が感じているのが保育者の変化。取り組みのアイデアは、各担任の先生が試行錯誤して生み出します。苦労もありますが、それだけに保護者の反応がよいときの喜びは大きく、園内の活気が増しているそうです。情報提供の手法や質を見直す取り組みは、保育者と保護者が互いに高め合う相乗効果を生み出しているようです。

板橋区立大谷口保育園



○1・2階が保育園、3階が地域集会所の複合施設。開かれた園づくりに力を入れ、地域の小・中学生や高校生、高齢者の訪問が多く、世代間交流が盛ん。

園長 花野 綾子先生

所在地 〒173-0031
東京都板橋区大谷口北町87番1号

園児数 122名（0～5歳児）

意識のギャップを克服する情報提供と関係づくり

インタビュー

板橋区立大谷口保育園の取り組みを指導する、白梅学園大学子ども学部准教授の増田修治先生に、同園の「保護者支援」と、「保護者と協力して子育てをするための保護者支援」のポイントをうかがいました。



増田修治先生

ますだ・しゅうじ
白梅学園大学子ども学部准教授。専門は、臨床教育学、教師教育論、教育実践論など。小学校教員を経て現職。著書に「子どもが育つ言葉かけ」(ひとなる書房)、「笑って伸ばす子どもの力」(主婦の友社)など。

信頼につながります。

保育者にとっても、「保護者から信頼されている、支持されている」という思いが自信になり、「さらにならぼう」という気持ちが生まれます。園では、取り組みを始めてからわずか半年間で、園内の雰囲気が目に見えて明るくなりました。その背後には、保育者と保護者がどちらも前向きな気持ちになり、互いの信頼関係が深まったことがあると思われます。

保護者の横のつながりを強化し「孤(こ)育て」から「共(とも)育て」へ

私は、今の日本の子育てが、「孤(こ)育て」になっていることを心配しています。「孤」は「孤独」から取ったものです。多くの保護者がひとりぼっちで子育てをしているという思いを持っているのではないのでしょうか。以前、小学校教員をしていたころに、保護者から「どう育てればよいのか分からない」といった悩みを打ち明けられたことがよくありました。「ほめてあげてください」と言っても、「どうほめるのですか」と返されて驚いたこともあります。保育者が考える以上に、基本的な子育てについて分かっていない保護者が多いという認識は必要かもしれません。

そのような保護者には、保育者がアドバイスするのも有効ですが、保

護者同士の横のつながりをつくれたら、さらに良いでしょう。互いに情報を交換し、「みんな同じことを悩んでいるんだな」と気持ちを共有できれば、子育てはずっと楽になります。そのように「孤育て」から「共(とも)育て」へと変えていく視点が保育者に求められています。

保護者を「認める」ことから関係づくりは始まる

保護者とのつながりは、あくまでも子どもを通してつくっていくものです。子どもは一人ひとりが心の中に「風呂敷」をもっているとイメージしてください。その中に「あの遊びが楽しかった」「明日はこれをしたい」といった多くの思いを包んで家にもって帰り、保護者の前でその風呂敷をひもといて、ひとつずつ取り出して話します。子どもが楽しそうに話す様子を見た保護者は、きっと保育者を信頼して、園の活動にも協力したいという気持ちが生まれる

でしょう。

中には自分の子どものことだけを考え、無理な要求をする保護者もいるかもしれません。はっきり言ってしまうと、親は誰しもわがままです。逆に、「わが子主義」ではない保護者などいるのでしょうか。でも、それで良いのだと思います。「『わが子主義』で大いに結構」と、認めてあげることから保護者の成長はスタートするのではないのでしょうか。次の段階として、「他の子どもとのかかわりに目を向けると、さらに成長しますよ」というメッセージを送れば、保護者の視野はだんだんと広がります。同時に保護者同士の横のつながりも生まれていくでしょう。こうした順序を踏まず、最初から「ほかの子どものもも考えてください」と言っても、なかなか聞き入れられないのも無理はないでしょう。

子どもが起こしたトラブルについて保護者に話す際にも、まずは認める態度を明確にしてください。いきなり核心から入らず、「〇〇ちゃん、こんなことができたんですよ」など

と、その子の良さをたくさん話すようにしましょう。そして保護者が十分に心を開いてから、「実は、こういうことが……」と切り出します。ポイントは、「こういうふうにしようと思いますが、お母さんはどう思われますか」などと、最終的な判断を保護者にゆだねることです。保育者の考えを押しつけず、あくまでも提案のかたちにすることで、協力して保育する関係をつくっていくのです。

特にトラブルをよく起こす子どもの保護者には気をつけて接する必要があります。これまでに子どものことで何度も注意され、「次は何を言われるのか」と身構えているかたが多くいらっしゃいます。まずは、保護者自身が忘れかけている、その子の良さに気づかせてあげましょう。子どもは、保育者や保護者から認められると、驚くほど変わるものです。そのような保育者と保護者の協力関係が、今の保育に求められているのではないのでしょうか。

成長の道筋を見えやすくし保護者を安心させる

保護者との間に信頼関係を築くには、まず保護者がどのような情報を欲しているのかを意識する必要があります。保護者は「わが子は成長しているか」「どのように他の子どもとかかわっているか」などをもっとも知りたがりですが、保育者はその日の活動内容といった事実を話して情報提供をしたつもりになっている

ことがよくあります。このギャップがある限り、保護者から十分な信頼を得るのは難しく思えます。

その点、今回の園の取り組みでは、日々の活動内容とともに、その背景にある保育者の思いや、子ども同士がかかわり合う姿を写真や言葉で分かりやすく伝え、成長の道筋を見えやすくしています。子育てに悩む保護者にとって、わが子の成長を知ること何よりの励みであり、「着実に育っている」という実感は園への

増田先生から現場の皆さんへのメッセージ

近年は、保育に求められることが増え、ますます多忙になっていますから、保護者支援についてゆっくりと考える時間がないという園もあるでしょう。しかし私は、保護者支援の強化は、幼保小連携をはじめ、さまざまなことに好影響をもたらすと考えています。

いわゆる「小1プロブレム」を引き起こす子どもは、保護者の育て方に問題が見られる傾向があります。子

どもに無関心だったり、乱暴な言葉を浴びせたりすることから、子どもの気持ちが不安定になっているのです。こうした問題に対しては、園の活動を通して子ども同士のつながりを大切にして、コミュニケーション能力を育てることです。そして、そこに保護者を巻き込んで親子がともに成長できるしくみをつくっていくことが大切だと思います。